NEWS LETTER

134

2026-11-02

銀座街づくり会議
銀座デザイン協議会・銀座駐車場協議会

〒104-0061 中央区銀座4-6-1 銀座三和ビル3F
Tel: 03.3567.1535 / Fax: 03.3563.0236 / E-mail: info@ginza-machidukuri.jp

【開催報告】銀座街づくり会議シンポジウム『地域と文化の記憶ー旧木挽町を再考する』

水辺と芝居の記憶を、未来へ

当日の動画はこちらから
ご覧いただけます

10月5日、esports 銀座 studio にて、東銀座・旧木挽町地区の歴史と文化を振り返り、これからの街づくりを考えるシンポジウムを開催しました。東條幹雄さん（全銀座会代表幹事）の挨拶に始まり、基調講演は吉見俊哉先生（國學院大學）。続くパネルディスカッションには中島直人先生（東京大学大学院教授）、松﨑宗平さん（松崎商店）が登壇。この地域に超高層計画が持ち込まれている今、地域に受け継がれてきた個性を見つめ直し、未来につなぐための議論が交わされました。

◆家族の記憶から、木挽町の歴史をたどる

吉見先生は、木挽町にあった祖母の旅館を手がかりに、家族の記憶と地域の歴史を辿ります。個人の記憶から土地の歴史を読み直す試みは、見慣れた風景の背後にある町の物語の豊かさを気づかせてくれます。

かつての木挽町周辺には、三十間堀や築地川などの水辺が張り巡らされ、木材や建築に関わる人々が行き交っていました。その後、森田座をはじめとする芝居小屋が集まり、演劇や興行の文化が花開く時代が訪れます。近代化のなかで煉瓦街として変貌を遂げた銀座とはまた異なる、木挽町ならではの歴史がありましたが、今では、三十間堀は埋め立てられ、道路に覆われた風景に変わり、かつての水辺の姿を想像することさえも難しくなってしまいました。

吉見先生は、「水辺」と「芝居」の記憶を現代に蘇らせる可能性を提起し、築地川上部を緑や文化の場として活用する構想を掲げます。歴史の記憶を現代の商いや文化活動に生かしていく視点を強調されました。

◆暮らしと商いがつくる、木挽町らしさ

江戸時代から続く「松﨑煎餅」を営む松﨑さんは、2021年、銀座西側から木挽町へとお店を移転します。

パネルディスカッションでは、その経験を通して感じた、住民の暮らしと商いの近さや、歌舞伎座を核に、芝居文化と日常の商いが交わる街の、文化と日常が結びついた木挽町ならではの個性を語りました。

また会場からは、銀座に新聞社があった背景から、印刷・出版業が集積したことや、日々の暮らしを支える小さな店舗や路地の重なり合いによって、木挽町独自の雰囲気が形づくられて来た歴史も語られました。

◆建築をつくるのではなく、人が出会う通りをつくる

人が歩き、豊かな出会いに満ちた通りにこそ、町の個性と文化が現れます。大規模開発による巨大な床の『面』ではなく、人が出会う『線』を育てることが大切だと吉見先生は語ります。そしてまた、「より高く、より速く」の追求よりも、より愉しく、よりしなやかで末永く続く町のあり方を考えることの大切さを指摘します。

銀座と築地の結節点に位置する木挽町は、両地域をつなぎ、独自の歴史と文化を育んできました。大規模再開発が見込まれる築地市場跡地、そして今、木挽町で検討されている再開発も街の様相を大きく変える可能性があります。開発規模や経済効率だけを問うのではなく、地域の個性と魅力を生かし、次の世代へと引き継ぐための街づくりを考える必要があります。

◆これからの世代へ、何を引き継ぐか

中島先生は、町の個性と、これから受け継いでいくべきものを地域全体で共有することの大切さを強調します。川に囲まれていた芝居町という地理的歴史に加え、木挽町の人々に大切にされてきた地域の記憶を現代の街づくりにどう生かすかを問いかけました。そして、木挽町の歴史を明らかにし、継承のあり方を考える「木挽町研究会」の構想も紹介されました。

閉会挨拶で堀田峰明さん（全銀座会街づくり委員長）は、今後も木挽町をテーマとしたシンポジウムや勉強会を継続し、地域にとって望ましい開発のあり方を導き出す方向を示しました。そして、100年後を見据えて、銀座と事業者が意義ある議論を重ね、未来に価値あるものを残していく意志を強調して締めくくりました。

＊ 全銀座会会員・銀座街づくり会議関係者の方々にお送りしています ＊ 許可なく無断で複写・複製および転用・転載することを禁じます ＊